

## 特別支援教育から考える体づくりの重要性（個人研究レポート簡単にまとめたバージョン）

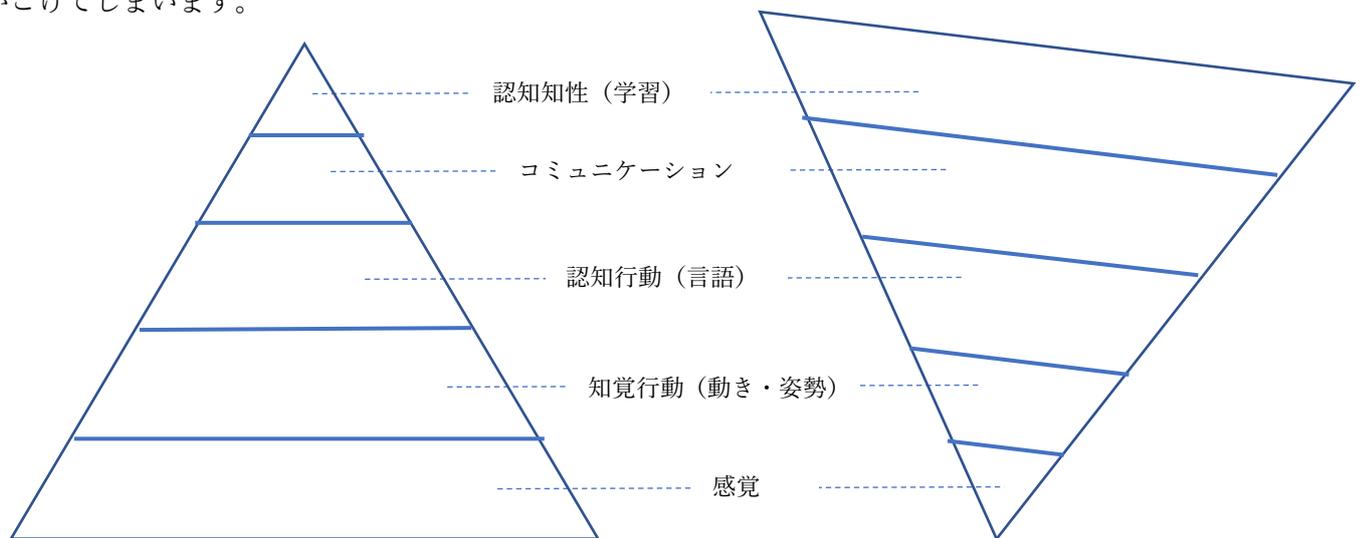
特別支援学級 樋口 亜紀

先日のコラボ研修会お疲れさまでした。私自身の課題も見えてきたのと同時にもっと理解を深めたい点も見えてきました。学ぶことって本当に楽しいな～と最近思う日々です。

さて、今年度のレポートで書かせていただいた内容をもう少し端的にまとめて、分かりやすく伝えたいと思い、私が現段階で理解していることを図で表して説明しようと思います。

私たちが何気なく行っている行動（物を見る,字を書く・写す,座る,人とコミュニケーションをとるなど）は、たくさんの感覚運動機能と認知機能（物事を記憶,思考,理解,学習,言語,判断などする機能）を駆使して行っています。

結論から言いますと、認知機能は感覚運動機能がしっかり育まれていないと、どこかで歪みが生じてくるということです。例えば、字を書く時。形をとらえる力（視覚機能）をもっていれば正しい形を認識し（認知機能）書くことができます。しかし、視覚機能が弱ければ、正しい形を認識することが難しく間違っただけの字を書いてしまいます。これが、認知の歪み（物事を正しくとらえられないこと）に繋がっていくと私は解釈しています。つまり下の図でいう逆三角形の状態です。現代の環境を考えると、逆三角形のような育ちをしてきた子どもたちは多く存在していると思います。そのような子どもたちにどれだけ上の段階（認知知性の部分）のことをしても、定着どころかこけてしまいます。



（参考資料）通級による指導担当教員研修講座 第2回発達障がい専門研修 皇学館大学 山本智子

このように、感覚運動機能（上図の感覚・知覚行動の部分、加納先生がおっしゃっていた情報発見能力に当たる部分だと私は解釈しています）が十分に育まれていない状態で、認知に関わる部分だけを育もうとすると不当な努力を子どもたちに強いることになりかねません。ここを知っているのと知らないのとでは、子どもたちの見取りに大きく影響してきますし、子どもたちの未来を変えてしまう可能性もあります。

そこで、すべての子どもたちにいいアプローチを与える機会になるのが体育だと私は感じています。なぜなら、体育は45分間体全身を使いながら、さまざまな機能を使う経験が得られる場だからです。ここで育まれた力は、日常においてさまざまな力に結びつきます。また、体育における真正な学び・触れさせたいおもしろさも私はこの感覚運動が育まれていてこそ感じるのだと思います。

そのような視点を持ちながら体育を行えば、体育で育みたい力+日常生活に必要な力+支援を必要とする子どもたちへのアプローチも兼ねることができるので、体育はすべての子どもたちの基盤づくりが行える重要な教科だと言えます。

ぜひ、みなさんもそのような視点で体育を一度考えてみてはいかがでしょうか。